

Sji

人とクルマのいい関係をめざして

6

2006 JUNE

●編集室：〒107-8556 東京都港区南青山2-1-1
本田技研工業株式会社
安全運転普及本部内
電話 03(5412)1736

●編集人：河野光彦

●年間購読料：1200円(定価1部100円・消費税込)

※郵便振替 口座番号：00170-7-173273

※加入者名：(株)アストクリエイティブ
安全運転普及本部係

今月の スポット

正しい判断力を身につけて、社会的なルールやマナーを自分のものにしてもらうためには、私たち大人が繰り返し教えていくしかありません。

(特集より)

CONTENTS

- シリーズ：現場最前線～生活道路の交通事故削減に向けて
第2回「生活道路の自転車事故」……………①
小学校・中学校・高校の自転車教育の現場から
地域との協力による教育の実践
- TOPICS ……………④
●二輪販売店でのお客様への安全運転普及活動
●活動短信／交通安全センター 5月
- OPINION ……………⑤
●久保田尚／生活道路の概念を転換させ、ドライバーとライダーに速度を抑制して走行する意識を持たせることが必要
- VOICE ……………⑤
- DOCUMENT EYE® ……………⑥
●ライダーとパッセンジャーが着用しているヘルメットの形状と着用状況を観察する

シリーズ：現場最前線～生活道路の交通事故削減に向けて 第2回「生活道路の自転車事故」

小学校・中学校・高校の自転車教育の現場から 地域との協力による教育の実践



鼓ヶ浦小学校では1～3年生と4～6年生に分かれて交通安全教室が行われている

生活道路では近年、自転車事故が増加傾向にある。その半数は出会い頭事故で、対自動車は8割を占め、中でも信号機のない交差点(交差点付近を含む)で多発している。死傷者数が多いのは高校生で、次いで中学生、小学生の順。中学生・高校生では登校時間と朝の通勤時間が重なり、クルマと接触する危険が高くなっている。一方、自転車対歩行者の事故も増えており、自転車が加害者となる事故も多くなってきている。いま、小学校、中学校、高校ではどのような自転車教育が行われているのか。それぞれの教育現場取材し、生活道路での自転車事故削減への方向性を探る。



波岡中学校では生徒の保護者が定期的に登校指導を行っている



磐田東高等学校のサイクルマナー教室では生徒が模擬事故を体験

5月8日、三重県鈴鹿市立鼓ヶ浦小学校(児童数233名)は、全校児童を対象とする年に1回の交通安全教室を開催した。1～3年生の低学年は2時限目、4～6年生の高学年は3時限目に行われる。本来なら、校庭や校区内の公道を自転車に乗って、安全な乗り方を体験するが、前日の雨の影響で予定を変更し体育館での実施となった。9時50分、1～3年生の交通安全教室が開始された。

指導にあたるのは、鈴鹿市交通安全教育指導員の2名と、交通安全教室の企画、プログラムづくりなどを行っている鈴鹿モビリティ研究会のインストラクター1名。スクリーンにクルマ用と歩行者用の信号機のイラストを映して、歩行者信号の青がチカチカしたらどうするかなど、児童に問いかけ、「青がチカチカしたら、もうすぐ赤になるサインだから止まってください」と確認する。

続いて自転車のヘルメットを見せ、「自転車に乗る時、かぶっている人？」と聞くと、手を上げたのは3人。「なぜヘルメットをかぶると思う？」と考えさせる。「こけたら頭が割れるから」と1人の児童が答える。「ヘルメットが頭を守ってくれるかどうか、実験してみよう」と指導員が舞台に上がった。「みんなの頭の中に入っている脳は、お豆腐みたいに柔らかいそうなんです。お豆腐が落ちたらどうなるかな？」と、実際に豆腐を落としてみせる。「みんなの頭の中がこうなったらイヤだね。本当にヘルメットが頭を守ってくれるか実験してみよう」。指導員はヘルメットに卵を入れ、テープで固定。ヘルメットを胸の高さから落下させる。卵は割れない。児童たちから驚きの声がある。「ヘルメットは卵を守ったね。でも本当の卵かな?」。透明の容器に実験で使った卵を落とすと、卵は割れた。「ヘルメットをかぶると、みんなの頭も守られます。ヘルメットで自分の命を守ってね」という言葉に、児童たちがうなずいた。

児童が自ら気づく 小学校の交通安全教育

3時限目、10時50分から4～6年生の交通安全教室が始まった。

加害者になる場合もあると自覚してもらおう

まず鼓ヶ浦小学校の村林直利校長が、「知っていることと、できることは違います。この機会に自分の行動を振り返ってみよう。そして改めて、自分の命は自分で守ることに考えてください」と挨拶。

続いて指導員が、自転車の話を始める。自転車はクルマの仲間であること、自転車に乗ることは、自分で責任を持たなければならないことを説明し、中学生が自転車の二人乗りをしていて、69歳の高齢者とぶつかり、死亡させてしまった事故を紹介した。「自転車のスピードは25km/hくらいですが、二人乗りをしていたためバランスを崩し、事故につながりました。みんなに考えてほしいことは、自分の命を守ること、人の命も守ることにつながるということです。自転車に乗る時も、大人になってクルマに乗る時も、道路は自分だけで走っているのではないということ、道路を使っている他の人のことも考えて乗ってほしいと思



写真上/信号機のない交差点や見通しの悪い交差点の安全な渡り方を指導
写真右/小学1～3年生の低学年では、信号機の見方など、基本的なことから児童たちに確認していく
写真右下/ヘルメットの中に卵を固定し落下させる実験は児童たちの高い関心を集めた



います」と話した。

次に、スクリーンに鈴鹿市の1年間の交通事故件数のグラフが映された。鈴鹿モビリティ研究会のインストラクターが、小学生の交通事故が年々増えていること、事故の10件中9件が交差点で起きていること、中学生になると自転車事故がほとんどであることを説明すると、児童たちは驚いた様子で真剣に聞いていた。

この後、自転車の点検の仕方についての説明に進む。ポイントは「ブ・タ・シャ・とつ」で、ブレーキは利くか、タイヤの空気は入っているか、車体のねじ等がゆるんでいたり、はずれていないか、前のライトが点灯するかなど、きちんと確認することを説明。

最後は自転車での交差点の渡り方について。「交差点を通過する時にやってほしいことは簡単です。止まって、右、左を見て安全を確認することです」と、自転車に乗って見本を見せる。その後、6年生の男子児童1名に、信号機のない交差点での安全確認を実演してもらった。「ブレーキをかけて、後ろを見て」と細かく指導。そして、「交差点では、停止すること。右、左の確認をしっかりすること。これだけのこと、事故を回避することができます。みなさんも必ずやってください」と呼びかけた。最後に、低学年の教室でも行ったヘルメットの実験。「自分の命は自分で守るために、ヘルメットをしてください」と指導員がヘルメットの重要性を伝えて、11時45分に交通安全教室は終了した。

体育館から出てきた6年生に感想を聞いた。ヘルメットの話が印象に残ったという児童は「なんでヘルメットをかぶらないといけないのか、わかった」と感想を話す。また、小学生の交通事故が多かったのに驚いたという児童は、「自転車はクルマの仲間だと思わなかった。ヒヤッしたり、ハッとしたり、事故になりそうなことはたくさんあります。信号機のない交差点では、右左の確認をしないで進んでしまう時もありました」と、自分の運転を振り返っていた。

交通安全教室を見学していたPTTA会長の山口善之さんは、「交通ルールを親が知らないの、まず、親の教育も必要」と

PTTA全員参加による 中学校の登校指導

千葉県木更津市立波岡中学校は生徒数280名。その7割にあたる197名が自転車通学だ。5月19日午前7時、同校PTTA校外指導委員会委員長の中光多美子さんが、「おはよう」と自転車通学途中の同校の生徒たちへ声をかける。小雨のなか、カッパを着用した生徒たちも、「おはようございます」と大きな声で返事をして通り過ぎる。波岡中学校ではPTTA校外指導委員会が中心となり、定期的に登校指導を行っている。校外指導委員会が指導を行う日と場所を決めて、通学路の途中の6カ所に保護者1～2名が立つ。保護者一人ひとり



波岡中学校の要望で、通学路の危険箇所を設置されたカーブミラー

いう。PTTA安全部部長の川北真子さんも、青の点滅信号では「急いで渡れ」と間違えて教えてきたことをあげ、「私たち大人も学ぶことがたくさんありました」と語る。「なぜヘルメットが必要なのかという話など、目に見える物を使って興味を示すように、わかりやすく伝えてくれたので子どもの印象に残ったと思います。今日学んだことを、子どもは家に帰って『お母さん知っています?』と親にも話をすると思います」。会長の山口さんは「自転車乗車時のヘルメットの着用を安全部から啓発していきたい」と述べた。

一部の保護者からは、中学校のようにヘルメットの着用を学校のルールで強制してほしいという意見もあるが、村林校長は強制には反対だという。「決まりだからかぶるのではなく、児童自らの意思でかぶってほしいのです。『ヘルメットをかぶっていれば、転倒した時に頭が保護されて安全だ』と、自分で気づく子どもに育てなければならぬと思います。交通安全が大切なことは、みんな知っています。知っているということと、わかるということは違います。わかるということは、実践につながるのです。その点で、この日の交通安全教室はヘルメットが必要なことを児童たちに考えさせるいい機会であったと、村林校長は評価していた。

「安全通信」という会報を毎月発行し、交通安全を全校生徒に呼びかけている。同校安全主任の松本祐滋教諭によると、「自転車が道路いっぱい広がって走っている。ホーンを鳴らしても、よけない」という苦情が住民から寄せられることがあるという。「おそらく、友人との話に夢中になって、自分たちが迷惑をかけているという認識がないのだと思います。だから、教職員や保護者からの呼びかけが重要になります。自分は事故に遭わないだろうという気持ちで事故の原因となります。呼びかけは継続的に行わないと、生徒たちの安全意識は高まっていきません」と語る。

あきらめず繰り返し指導することは、田村博校長の信念でもある。「中学生に大事なこと、通学路はそこに暮らす方々が利用する生活道路であることを認識することです。生活道路を利用するのは自分だけではない。だから、まわりに迷惑をかけるようにルールを守らなければいけない。正しい判断力を身につけて、社会的なルールやマナーを自分のものにしてもらうためには、私たち大人が繰り返し教える必要があります。生

写真上/保護者が協力して生徒たちの通学を見守る
写真左/「自転車押し歩き区間」でクルマの迷惑にならないよう、1列になって進む波岡中学校の生徒たち

シリーズ:現場最前線～生活道路の交通事故削減に向けて 第2回「生活道路の自転車事故」

自転車は車両であり、

徒たちはまだ社会性を身につけていない段階です。まわりのことを考えず、自分勝手な行動をしまわうことあります。同じ生活道路を走るドライバーにも、そのことを理解していただき、自転車を邪魔者扱いしないで、自転車の脇を通過する時は速度を下げるなどの配慮をしてほしいと思います」。

このような取り組みの効果もあり、最近では交通事故はほとんど起きていない。今後は、管轄の警察署と連携した交通事故防止のための全校集会を開催する予定だ。さらに、松本教諭は「ドライバーから見ると、自転車もクルマと同様に危険な存在であることを生徒たちに理解してほしい」と、クルマからの視点での指導ができないか考えているそうだ。

地域との共存をめざした 高校の交通安全教室

どんよりとした曇り空の下、前日の雨でまだ少し柔らかなグラウンドに生徒たちが集まる。磐田東高等学校(静岡県磐田市)の新生313名を対象とした「サイクルマナー教室」が始まる。4月15日10時45分、全員が整列し、「お願いします」の大きな声でスタート。この日、講師を務めるのは交通安全センターレインボー浜松のインストラクター2名。まず、自転車は車両であり、ルールを守らないと罰則があり、過失がある場合は加害者となって賠償の必要もあること、そうした事故を防ぐために自転車にはどのような危険があるか知ってもらいたいと、サイクルマナー教室の趣旨を説明する。

まず、四輪車の特性を知るプログラムから始まる。生徒が四輪車の運転席に座り、インストラクターや生徒が四輪車の死角を確認する。前方、右後輪横、左後輪横に立って姿が見えるか確認し、ドライバーには見えない死角があることを学ぶ。続いて自転車を使った模擬事故実験に移る。交差点手前に停車



生徒が運転席に座り、四輪車の死角を確認した

したマイクロバスの左側方を走り、交差点に飛び出し、右方向からくる四輪車が見えたら停止するという動作を6人の生徒が一人ずつ、徐々にスピードを上げて行う(表紙写真参照)。スピードを速くした5、6人目になると急ブレーキをかけた右から来る四輪車の前を通過してから停止してしまふ。「交差点の手前でスピードを落とさなければ、四輪車が通過する前に止まれない。クルマがどこから出てくるのか、いつブレーキをかけるのかを常に考えていないと事故に遭って人生が変わってしまうかもしれない」と、インストラクターが指導する。次に、停車中のマイクロバスの陰から出てきた歩行者と、対向から右折してきた四輪車の模擬事故実験(左下写真参照)。2人の生徒が歩行者となって1人目は普通速度で歩く。四輪車は生徒に気づき、安全に停止。2人目は全速力で走って飛び出す。四輪車は衝突寸前で急ブレーキを踏んだ。さらに生徒4人が停車中のバスの前輪左横に1列に並び、バスの進行方向とは逆向きに立つ。バスがハンドルをいっばいにして左折する際、バスに当たりそうになったら逃げるという実験。バスが肩をかすめ始めると、次々に生徒が走って避ける。1人、2人、3人。ところが、4人目はバスとの距離があり、逃げる必要がない。インストラクターがバスの通った跡を指して、内輪差と巻き込みを説明する。



引き続きパイロンが等間隔に並んでいるコースを、自転車でジグザグ走行する。自転車での模擬事故実験に参加した6人が再び挑戦する。最初は両手で、次は片手で走行。ふらついて片足をついたり、のろのろと走る。さらに、パイロンの間隔を狭くするとパイロンにぶつかったり、うまく曲がれない生徒が続出。他の6人に交代するが、やはり相当苦戦する。「二輪車は車体を傾けて曲がるという特性があり、ハンドルをきって曲がるという行為には限界があります」と説明。ここで、一人の生徒にパイロンの周りをぐるぐる回ってもらい、車体が傾いてハンドルが安定することを見せる。最後はブレーキ。「前輪ブレーキと後輪ブレーキはどちらがよく効きますか？」の問いに「前」「後ろ」と、生徒から声が次々と飛び交う。実際にブレーキをかけて

押ししてみる。後輪ブレーキをかけたまま動かすと、自転車は進む。前輪ブレーキをかけた状態では動かない。それでもなお、自転車を押すと後輪が浮き上がる。「ブレーキはタイヤの回転を止めるだけ。タイヤと路面との摩擦力で自転車は止まるのです。事故が起きても、スピードを緩めればダメージが少なくなり、スピードを落とせば早く危険を見つけれられるか。大事なのはみなさんが、こうしたことを考えることです」と、インストラクター。最後に改めて、「自転車は車両であり、『止まれ』の標識では止まる義務があります。四輪車との事故でケガをするのは自転車ですが、必ずしも被害者だけではない。ルールを無視すれば加害者になり得ます」と強調した。12時10分、サイクルマナー教室は終了した。

自転車での模擬事故実験に参加した岩田大樹さんは「通学の時、たまに携帯電話を使ってしまうが、今日片手でパイロンの間をジグザグに走ってみて、その怖さを実感しました。また、自転車も加害者になるという話はびっくりしました。これまでは、歩行者に対して自分が加害者になる、という意識はありませんでした」と、日頃の自分の運転を振り返る。同じく実験に参加した磯川将さんも「自転車に加害者になるという話が一番印象に残りました。自転車は結構スピードが出る乗り物なので、子どもやお年寄りのそばを通過する時は特に気をつけたいと思います」と心を締めつけた。磐田東高等学校では全校生徒の約8割が自転車通学。中高一貫の同校では毎朝、教職員が学校付近に立ち、交通安全の指導を行っている。交通安全担当の内田勝之教諭は、生徒たちが交通ルールを知らな過ぎることに驚かされるという。「一時停止の標識も平気で無視するので、『あの標識を知らないの?』と聞いても『知らない』と答える生徒が多い。自転車は歩行者という感覚なのではないか。かといって、クルマを怖がっている風でもなく、クルマがいても急に車道に飛び出したり、ほとんど意識していない。自分たちが優先だと思っただけのような運転が目立ちます」と話す。だから生徒に自転車は車両である、加害者になりうるという自覚してもらおうと、サイクルマナー教室の大きなねらいだと語る。生徒課長の北野宗克教諭は2列、3列での並走、一時不停止、二人乗りなど、生徒の自転車のマナーの悪さには頭を悩ませている。同校は毎年、春に新生を対象として開催するサイクルマナー教室以外にも、春・秋の交通安全運動期間中の朝には生徒の安全委員が旗を持って、生徒に安全を呼びかけるほか、磐田・袋井地域の学校と連携して交通安全推進を行っている。これは街頭指導、地域の危険な場所の洗い出しや自転車マナー教室、生徒が交通安全に関する発表を行う交通安全サミットの開催などが主な活動内容だ。北野教諭は同校の交通安全教育の目標に「地域との共存」をあげている。「まずは、地域の方に迷惑をかける行動を止めさせています。一人ひとり決して悪い子ではないし、常識知らずでもないと思います。ただ、登下校時など友達と一緒に

生活道路を走ることが多い自転車の交通事故防止には、地域との共存が欠かせない。最初に紹介した鼓ヶ浦小学校の地域との関係を重視した取り組みがその参考となる。同校では、子どもたちの安全について、「地域の子どもは地域で守る」「自分の命は自分で守る」「地域の死角をなくす」ことを目標に活動する。各家庭からのアンケート結果をもとに作成した通学路マップには、登下校の際に子どもが1人になる場所や、交通事故などの危険箇所が明記されている。村林校長は、「児童が1人になる場所や危険箇所が、実は通学路のほぼ全体に広がっていること」に驚いたという。こうした状況に、地域も学校に協力しているという。「地域の方々が外を歩く際に、子どもたちを見守っていただく活動を行っています。この地域は悪いことができないという雰囲気を作る必要があります。それが地域の力と言えます。今回は雨の影響でできなかった、校区内を自転車で走る安全運転の体験も、児童の生活圏がそのまま教材になっているところに良さがありますが、地域の方々が協力してくださって初めて実現できることです」。村林校長は地域との連携、協力を交通安全教育に欠かせないものと考えている。

そんな村林校長に、昨年うれい出来事があったという。「ある児童が『怖い思いをした場所があるから、そこにカーブミラーをつけてほしい』と訴えてきたので、『家の人と地区の代表の方に話をしてみよう』と返答をしたところ、その児童自らが代表者をお願いしに行ったのです。その方も、直ちに市民センターに要望し、しばらくして現場にカーブミラーが設置された。児童が自分で危険に気づき、その要望を地域の人が受け止め実現できたことは、本当に地域の力だと感じています」。学校の交通安全教育が地域との協力によって進むことを示唆するエピソードだ。